

前へ

第一話

當眞嗣朗

「前へ！」 第一話

當眞嗣朗

Aは男性器を持つている。大きさはいくぶん頼りない。長さも不充分で、勃起時の固さも満足いくものではない。それは濃い陰毛の奥に隠れて、ひつ

そりと出番が来るのを待つていて。ネクスト・バットーズ・ボックスに控える野球選手のように、事の成り行きをじっと見守りながら、平静さを装つている。

Aはゲイだから、つまり男性でありながら、性愛の対象が女性ではなく、同じ男性だということであるからそれが女性器に挿入されることはない。たぶんないだろう。かと言つて、同性間の肛門を用い

たセックスにも興味はない。それは相当な痛みを伴うだろうし、おそらくは衛生的に問題があるはずだ。だからセックスをする時は主に、手か口を使うことになる。もちろん、その相手がいる場合はどういうことだ。

Aは今、四十歳で、独身だ。過去には、他の多くの男性がそうするように、女性と親しい付き合いを持つていた。愉しいデートを重ね、ホテルに行き、熱く燃え上ることもあった。結婚という言葉が話題にのぼり、子を設けることが現実味を帯びてくるという段階にもあった。

しかしその後、その健全な性的嗜好がある種の躊躇を得てからは、Aは孤独を生涯の伴侶だと考

えるようになった。誰との間にも親しい交際関係を持つことはなくなつた。

もちろん、同性はべつだ。

もつとも現在、交際相手とは、ちょっとした面倒をかかえているのだが。

自分が結局は男性しか愛せないと認識した時、そのことで A は深く傷ついたのだろうか？

だからなんだと言うのだ？

直りの感情が、A の胸にはふつと生じた。

答えは、ノーだ。驚くべきことにそこには、心をかき乱されるような衝撃はなかつた。胸の内は平靜で、すとんと溜飲が下がるような安らいだ気持ちだけがあつた。何故ならその認識で、自分という人間が正確に理解できることに気付いたからだ。家

それは日課のランニングの中、ふと頭に浮かんだ最も有意味な言葉だつた。冬場の日没後の国道沿いを走る時の、孤独で凍えた思考が弾き出

族はずいぶん奇異に思ったことだろう。

もちろん、いくぶんの気まずさはあつた。それは朝の目覚めの瞬間がスムーズに訪れなかつた休日の日のように、不快な感覚が意識の表層に残され

ていた。それが落ち着くまでには、適度な時間を要した。しかし、その時機が一旦過ぎてしまえば、だからなんだと言うのだ？

といふ单纯明快な開き

最も明確でスマートな答え。だからなんだと言う

のだ？ どんなに重苦しく巨大な悩み事を抱えて

向に突き進み、政治的なバランス感覚が失われる
わけでもないのだ。

苦しい時でも、究極的にはその一言で、ヒトは福音
の鐘の音を聞くだろう。

それはもちろん、追い詰められた人間の思考が
見せる一種の混乱に満ちた幻想に過ぎない。苦し
みが生んだ副産物のひとつだ。それで当然、事態は
なんら改善されることがないのかもしれない。悪
い場合には物事が更なる混乱を得て、收拾の付か
ない発展を見せることがあるのかもしれない。

しかしながら、とAは思う。例えそれで自分自身
が傷ついたところで、それで誰かを無意味に傷つ

けることはないだろう。誰かの持ち物を乱暴に脅
し取ることは当然ないし、それで世界が一定の方

だからAは、今日も孤独で寡黙なランニングに
励みながら、自然な思考で頭に答えを思い浮かべ
る。ここに男性器がひとつある、と。その持ち主は
他でもなく自分自身で、それをどのように使うか
は自由だ。それで不幸にも自分以外の誰かを傷つ
けることがないのなら、時には自慰行為に耽るの
も良いだろう、と。当然、その際に頭に思い浮かべ
るのは、男性の裸だ。それは、自明のことなのだ。
そんなある日のランニングの中、Aはある閃
きを得て、高揚感が身体に満ちてくるのを感じた。

それは通常通りのコースを僅かにも逸れることなく、いつものように交差点で折り返した瞬間に、ふと頭に思い浮かんだ。だからなんだというのだ？　という言葉に反論するようにして。

それは、こうだ。

だからと言つて、この今までいいわけがない。

その言葉は、簡単には拭い去ることの出来ない

厄介な油汚れのように、意識の表層に染み付いていた。まるでそれ自体が生きているかのように、その場で確かな鼓動を打ち出していた。その感覚は新鮮であると同時に、馴染み深いものでもあった。何故ならそれは、Aが自分自身を一種のクイア（崎

形なもの）であると認識した時の気まずさと、様相を似通わせていたからだ。

だからと言つて、この今までいいわけがない。

確かに、その言葉が指し示す通りの日常を、Aは

送っていた。生活の糧を得るための仕事を持たず、他人との関わりを絶ち、社会から孤立することを当面の目標と定めて、日々を無為に送り出していた。それは最早、自分にとつて最も自然な状態で、改善される見込みのない安寧の日々だつた。家族だつて、呆れていた。

しかしある瞬間にAには、こういう疑問が生まれたのだ。だからと言って、この今までいいわけが

ない。そうだ。Aに与えられた神からのギフトとも
言うべきこの日々が、後どのくらい続くにせよ、今
のままの状態で惰性に身を任せるわけにはいかな
い。生きるための目的は？　将来のヴィジョン
は？　なにより、生活の糧を得るための仕事は？

Aはこれまで、それらの煩わしいことを一方的に
放り出して、だからなんだと言うのだ？　と、まる
で自分の人生を傍観していたのだ。そこには、自分
の足取りに責任を持つという真摯な態度さえ、一
欠片も存在していなかった。もちろん、このままで
いいわけがない。

何故、本を？　当然それは、凡百の人間の考える
最良のアイディアとは言えない閃きだった。なに
か新しいことを始めようと考へて、自費で本を出
版しよう等と考える人間は、少なくないとは言え、

Aは、その言葉を頭のなかで素早くくりかえし
た。それは今、自分自身にとつて、最も必要なこと
だつた。これまでの自分を肯定するために。そして、
これから自分の自分を築いていくために。

とりあえずAが思つたのは、自費出版をしてみ
よう、というものだつた。

自分で資金を投じて、本を出版してみようと思
つたのだ。

変わらなきや！

大多数を占めているわけではないだろう。また、自費出版に関しては、詐欺被害のような問題も数多く散見するのだ。よほど注意して事に当たらなければ、痛い目を見ることになるはずだった。

それでも一旦動き出した自分の思考に歯止めをかけるのは、我がことながら難しかった。それはまるで突然降り出した雨のように、一度勢いを増したら、なかなか落ち着くことがなかつた。こうなつたら、降るだけ降つて、その後なにが起きるのかを待つしかないのだ。例えその後、不幸な大震災がやつてきたとしても、それは黙つて受け入れるより仕方のないことなのだ。幸いなことにAは、出版の世界に知人を持っていた。その男の勤めている出

版社は、地方のちいさな出版社だったが、業界では確かな信頼を得ていた。そこに問い合わせれば、とりあえず原稿を引き受けてはくれるだろう。

Aは子供の頃からとにかく本を読むことが好きだつた。学校の休み時間や帰宅後に、自宅の自分の部屋に閉じこもつて、とにかく暇を見つけては本のページをめくつていた。まるで紙に印刷された文字が、現実の世界よりもずっと興味深く、豊かなリアリティを持つているとでも言うかのようだ。それは最早、持て余した暇を読書で潰すという程度のものではなく、読書をすることが学業を押しのけて仕事そのものとなり、それで毎日がビデオの早送りのように慌しく過ぎていくといった感じ

だつた。それでいて頭のなかは、つねにクリアな状態に保たれていて、そこには滋養に満ちた豊かなヴィジョンが溢れそうなほどに詰まっているのだった。

手に取る本の多くは学校の図書室から借りてき

たもので、主に小説だつた。「ナルニア国物語」や「はてしない物語」などの外国のファンタジー小説や、外国のミステリー全集のようなものを、手当たりしだい片つ端から読んでいった。冷房の効いた静かで快適なその空間は、その当時のまだまだ未成熟なAにとって、一種の避難場所として有効に機能した。そこにはクラスメイトたちの意地悪な目はなく、ひとり本に向かっているだけで確実

に、「ここではないどこか」に行けたのだ。そしてそれは同時に、現実の世界を強く補強してくれる「なにか」を与えてくれた。原始の森で産声をあげた人類が、進歩というリレーのバトンを、Aに力強く渡したのだ。長い時を経て。

それが生きていく上でなにかの役に立つたのか？ そう誰かに問いかけられたら、Aは即答するだろう。じゅうぶんに役立つたのだ、と。苦しい減量の果てに試合に挑んだ若いボクサーの練り出す右ストレートのように。それは素早い動きで相手のガードを潜り抜け、鋭くその頸を破壊するだろう。そしてAは敵のいないリングの上で、熱狂した観衆に向かってこう言うのだ。

「ぼくは、読んだ！ 文句があるか？」

Aは幼少の頃から言葉に取り憑かれていた。それは頭の中でなにかを訴えながら忙しなく飛び交い、出口を探して迷っていた。そのままの状態で放置すればいずれそれらの意気盛んな言葉たちは、不満を内側に溜め込んだまま風船のように膨らみ、盛大に破裂するかもしれないなかつた。だからAは、それらを自分の身体の外側へと解放する必要があつた。それは自然の摂理でもあつた。

それからAは数ヶ月もの時間を、これからの自分が人生をあらゆる面で下支えしてくれるだろうつてうねり、物語群を形成していた。それらはいくつものパターンを持ち、様々な印象を読み手に抱かさせていた。心地よく微笑ませるもの、泣かせるもの、ある場合には不快感を与える、怒りを引き起こすものもあつた。それらはまっさらな画用紙の上に絵や文字となつて記され、簡単に製本されて読者の下へと届けられた。それを読むのは主に親や兄弟だった。そしてそれから親戚たちの目に触れ、時には学校のクラスメイトたちにまで届いた。

その語られるべき言葉は、それぞれに繋がりあつてうねり、物語群を形成していた。それらはいく

作品の執筆に当てなければならなかつた。読書を

する時間、そして料理や掃除をする時間を削り、その一点を唯一の突破口としてしっかりと見定める必要があった。なんの突破口？　もちろん、自らの対峙している手ごわい世の中に対するものだ。それ以外に、なにがある？

その作業は、昼夜を問わずおこなわれた。とにかく集中力が最大の武器となつた。コンピューターを起動させ、ワープロソフトを立ち上げ、まだなにも記されていない真っ白な画面に文字を打ち込んでいく地道な作業は、自分の内面に深く埋もれ、未だ発見されずにいるものを丁寧に掘り出していくような作業だった。時には、それを辛く感じることもあつた。

しかしAは、その作業を無事、やり遂げることが出来たのだつた。

出版社に持ち込むべき原稿を一通り書き終えたAの頭の中は、厄介な片付けを終えた後の机の上のように、綺麗に整理整頓されていた。そこには僅かな埃もなく、表面は丁寧に磨かれ、必要なものは所定の位置にきちんと仕舞われてあつた。本は書棚に整然と並べられ、筆記用具はペンホルダーにきちんと立てられていた。

それからAは数週間を費やして、文章の見直しを念入りにおこなつた。高いレベルでの集中力を

絶やさず、根気と地道な努力を持つて、気に入らない箇所や明らかな間違いが認められる箇所を、じつくりと丁寧にべつの言葉に書き換えていった。

小幅な修正で足りる場合があり、大幅な変更を求められる場合があった。それでも文章のトーンは一定のリズムをキープしていくたし、物語はその流れを塞き止められることなくしっかりと抑揚を保っていたから、それで全体の印象が変わることはなかつた。

すべての作業を終えて、最終的な見直しをおこなつた後、Aはプリンターの電源を入れた。

プリントアウトされた原稿の束は、それを持つ

手にずつしりとした重量を感じさせた。それは四〇〇字詰め原稿用紙に換算して、六〇〇枚近くの分量があつた。それらの重厚な文字の連なりは、Aの世界観を代弁する弁士であり、未知の世界を切り開く武器であった。そして豊穣の実りをもたらしてくれるまだ小さな苗だつた。

Aは自分自身に、よく言い聞かせる必要があつた。

お前はよくやつた！

つづく